

船弁慶、小沢錦弥、城山の月、小関英子、新撰組、村木桜柳、吟舞春望、宮坂、池田。

日本琵琶芸術 四月二十日、東京、西新宿柏会四月例会、柏ビル六階、雨宮会長宅。門...

筑前琵琶 四月二十九日、神戸、戸文化中心、演奏会、主催、柴田旭堂会、後援、平...

春の調べ、旭寿、旭晨、旭楓、旭昶、旭海、旭勢、旭峰、一英、旭声、旭貴、旭晶、雅子...

錦心流琵琶 五月五日、大阪、天神筋、関西新進演奏会、朝陽会館、主催、小川吟水...

京都琵琶協会 五月十日、昼、梅原旭、五月定例茶話会、濤女史宅、会員順演のあ...

琵琶 機関紙

京 結

第二五二号 京 絃 社

楽理を学びながら 合理的に技を磨きま



普門義則

リズムと間について(続一) 一、「語りもの」と「歌もの」のリズム 我邦の伝統音楽、略して邦楽の歌曲には「歌...

した。新楽器三味線の伝来と共に、当時の進歩的な盲人琵琶法師が琵琶の調絃法と撓で之...

明治の後期から大正、昭和の初期の琵琶楽の盛んな時代は琵琶歌と言って大衆に親まれて...

薩摩琵琶が明治初期、東京に普及され、そこで東京風の薩摩琵琶が生れた。中でも永田錦心は歌唱法の研究に力を注ぎ、琵琶の奏法...

梅原旭濤、矢吹旭美津、古谷寛水、水内煖水、平井春嶺、植村寛水の八氏であった。 創立記念 五月十一日、神戸、新聞会館、演奏大会、C.C.ホール、主催、神戸琵琶愛吟...

昭和五十年六月一日発行(非売品) 編集者 植村寛水 発行所 京絃社 高槻市津之江北町一ノ二二三 電話(〇七二六八五)六〇五一番

呼吸リズム型とも云う)

「基本吟(もとぎん)」「七五調の韻文が基準とされている歌詞で吟替(ぎんがわり)、詩歌吟(しいかぎん)及崩(くづれ)を除く、地声、中干流、切、大干、中干、中干落、中干投、干変調、地変調等で律旋系の都節音階(陰旋法)を主とする田舎節音階(陽旋法)との混合。

「詩歌吟(しいかぎん)」「読んで字の如く漢詩と和歌の吟法でその音階旋法は基本吟(もとぎん)と同じ。

「吟替(ぎんがわり)」「歌詩の内容表現方法は基本吟(もとぎん)とは趣を変えざる為、音階旋法は全く異った呂旋の五音階を採用し最も感慨深く詠嘆調に弾吟するものであります。この自由リズム型に二つの型があります。

①言語風無拍子型

日常会話風、又は文章を素読する全く自由ナリズム

薩摩琵琶では全く用いませませんが平家琵琶では白声(しらごえ)と言って語句の状況の説明や登場人物の会話の部分となります。

当時の京都の日常語のアクセントであると言われており後世には誇張した三味線語浄瑠璃の言葉になったものであります。

錦心流琵琶から派生した錦琵琶ではこの言語風無拍子型、即会話を活用しており、錦心流にも取り入れているのを聞いたことがあります。

②朗読風(朗吟風)無拍子型

七五調の韻文をゆるやかな波動リズム(二秒三秒)に乗せて、即ち呼吸を整えて語

ものであり、呼吸リズムの態様であります。薩摩琵琶の語りはこの朗読風無拍子型の基本をなしております。前述の様に、基本吟(もとぎん)、詩歌吟(しいかぎん)、吟替(ぎんがわり)がこのリズムに属し、文意の音楽的表現として最も大切なものであります。

今回はこの自由リズムの特徴と効用について又拍子リズムとの関係、歌のリズムと弾法のリズムとの相互関係を説明してリズムと聞の講を終りたいと思っております。

狂醉亭漫録(百十二)

利休処刑事情(一)

古谷 竟水



松田静水先生が原田謙次氏の作詞作曲されたもので利休の最期と題する曲がある。

歌の内容は大團圓白秀吉が天正十八年春、東山花見帰りの夕間暮、牛車の中から利休の娘お吟の艶姿を見染め、側女に差出す様懇請するが、利休はお吟は既に縁談まどまる者、之を破って迄自分の栄達を図る者ではないと断然拒絶する。秀吉は此件を根に持つ間に、翌春利休が大徳寺の僧古溪の契めにより自分の木像を三門楼上に立てた事が秀吉の耳に入

り、貴人御通行の三門楼上に下賤の木像を掲ぐるとは不遜の極みと断じ、利休に対して切腹を命ずる。

豫て覚悟の利休は驚かず、梅が香匂う茶室に弟子宗藏を呼び、かたみの茶碗を与えた上茶道の精神を述べて遺言とし、自ら茶を立てて之を服し、従容として自刃する。

此の話は古来世に喧伝され、秀吉の好色と専横に憤慨し利休に同情する人が多いが、此の件は果して此の様な簡単な事であったのだろうか。私はどうも腑に落ちないので色々と思案する間に昔読んだ本に、お吟は逆賊松永弾正の遺児であることを利休が養女として育てた事、又一時異端者として追放された明智光秀の娘で細川忠興に嫁いだガラシャ夫人とは親交があった事を思い出した。

又利休の性格であるが、当初は謙虚に秀吉に仕え立身したが、晩年地位も安定し尻が温まるに従い傲慢な性格の地金が表われ、秀吉の無学を軽蔑したり、その横暴に対し反抗的な態度を見せたり、殊に怪しからんのは自分古美術の智識あるを悪用し、諸大名や富豪等に対し安価の品を高価に売り付けて暴利を貪る位は兎に角、相手が無知と見れば贖物を真物と称したり、新品を古物に見せかけたりして巨利を騙し取ったりした。此の様な種々の悪評が秀吉の知る所となり漸に障った結果、木像の件を口実に処刑を決定したものと私は推定する。秀吉は勿論好色漢ではあったが、最高権力者として別に女に不自由する身分で

も無く、お吟一人に煩惱の火を燃やしたとは到底考えられない。

さて此の件を判断する参考として主人公の利休の略歴を調べると、

千宗易(一五二一—一五九一)

茶人、幼名は與四郎、利休と号す。堺の人。十七歳で茶道を学び、台子伝授を紹鷗から受け、最もその技に長じた。はじめ織田信長に仕え、度々安土に伺候し、のち豊臣秀吉に仕えて眷遇せられた。

天正十六年後陽成天皇が聚楽第に行幸になつた時には、秀吉は技芸に長じた者を数人選び奏請して綱位に陞した。その時宗易固辞して受けず、よって大徳寺の僧古溪に命じて、利休居士の号を授けしめた。この年十月秀吉が北野に遊んで茗蘇を張つた時、宗易をしてその事を掌らしめた。

その後茶事大いに起り、宗易は益々尊敬せられるようになった。宗易はまた茶器の新旧可否を鑑定して大いに富を得たが、秀吉の寵を待んで漸く誇奢に走り、親疎異同によつて贖物を真物と云い、新しいものを古いものと称し贖々人を騙した。(百科事典記載)

宗易に吟子という娘があり、秀吉が天正十八年黒谷山徑に遊んだ時これを認め、人をして宗易に説いたが、既に婚約があるといひ固辞した。かくて秀吉の快く思っていないかゝつたところへ、讒言した人があり、天正十九年二月遂に中村一氏等を遣わして切腹を命じた。宗易は命を受けるや、花を活け茶を点じ

て、阿弥陀堂釜、鉢排茶碗、石燈籠を細川忠興に授け、自製茶匙、織糸茶碗を弟子宗藏に授け従容として割腹した。時に年七十一とある。又お吟が始めて秀吉に邂逅した時点に於て既に泉州堺の豪商で且つ茶人でもある、隣屋宗庵に嫁いで居たという一説もある。(続く)

都派びわ錦穂会一門演奏会

時 六月一日(日) 午後五時半  
所 東京上野 本 牧亭  
主催 錦穂 後援 会  
後援 日本琵琶楽協会  
石田琵琶店  
(入場料 五〇〇円)  
都錦穂宗家及一門の外、加藤錦陽、甲田勸水、宮武旭豊、小林総水、石田脩水、長谷川錦舟各氏賛助出演

我が道を行く

六十五年(二六)

西郷 天風



さて、水戸という処は名にし負う天下の副将軍、源光圀の城下とあって武門の誇高く、従って尚武の地の常として遊芸事を下賤のものときめつけ、琵琶師も芸人の類と見なされおるなから、旧水戸藩の薙刀指南役の孫、平方家の御曹子が今様琵琶法師を夢に描

きつゝ、斯道の将来に就て意見を求めて来た。その頃の噂によれば薩摩琵琶の本場鹿児島では、筑前琵琶が突風の勢で押よせおると云う、芸風で、殊に筑前琵琶の師匠不在の水戸としては最も有望ならんと、当時東京に名高き富永旭昇先生を推挙し紹介の勞をとつた。平方氏は時を移さず上京、旭昇師の門に入り僅か二年にして師範免許となり、旭玄と号して帰省した、その駿足もさることながら非風の芸才と人望は郷党の誇りとうたわれ、教授所開設披露演奏会には恩師旭昇先生も一門の名手数名と共に参加され、薩摩琵琶の私も特別出演の榮を得た訳だが、時恰も日本軍のシベリヤ出兵等で国民の士気高揚の情勢下にある折とて、かつて見ぬ程の大盛會裡に終了、旭玄師の活躍もこれからと我々絃友の期待はいよいよ大なるに反し、生来虚弱體質の師は座骨神経疾患の為め惜しくも中途挫折の止むなきに至り、斯界は些か寂寞を感じおる矢先、折よくも我々の耳朶を打つ朗報を得た。事實は小説よりも奇なり。と云う謠を其まま背負つた筑前琵琶の名手が、遙々九州からしかも二十年ぶりて帰つて来ると云う生粹の水戸人が噂となつて現れたのである。何ぞ知らん、それはその十五年前既に墓石と化しおる人物で、かの松ノ小路の山口家え出入の染物職山本の先妻の一人息子であつたとは。そもそも十五才の時生母を失い継母と共に家業を手伝いつゝあつた彼は、趣味として尺

八吹奏をよくし、托鉢の虚無僧(明治大正時代は何処でも見受けられた)を見つけては自分の部屋に泊めて合奏を楽しみ居る内、同年配の虚無僧と意気投合、家業を捨て、托鉢の旅立つたのが十八才の時だったが、徴兵検査が近づいても行方不明なまま余儀なく死亡手續を取り墓碑を建て、しまったと云うのである。それ以後春秋を重ねる事既に二十年、今や人生の限界にたつ父親の許に突如として届いたのが、日ならずしてその懐に帰り来るという仲の音信である。

来る年も来る年も心待ちに待ちあぐんだ親の心の中いかにばかりか、まして琵琶師匠となり愛妻と共にあっては、染物職人から見れば鳥が鳶を生んだ以上の優越感に身も心も浮々と、家業など手につかず、お得意先を飛廻りつゝその嬉しさ報告に余念なき有様となった。

やがて半月後、山本夫妻は市の一等旅館芝田屋におさまり、初対面の私は其処で「湖水渡」の名曲に接し、早速披露演奏会の準備に当った。出演者は地元から平方師の門弟小堀と藤村文史、錦心流の伊藤刀研師と正派の私の四名で、山本旭仙?夫妻は筑前琵琶の外に、尺八三味線合奏の長唄一曲を余興に加えて、総て七曲ながら中々の豪華さに、満員の入場客をよるこぼせたのであった。

当時私の門下で県庁の会計課長島居潮風氏は、茨城県庁各課長級の夫人達に紹介の労をとったお蔭で、朝野名士の夫人達十数名の入門者を得たことは洵に驚異的現象とも見られ

県庁に近い大町の教授所は異彩に輝く存在となった。

亦芸界出身の旭仙師夫人はその洗練された応対ぶりが舅に対しても変りなく、為に老境にある染物職の山本には俄か大名の感を深からしめ、浮き浮きと仲の家に通う楽しみが、いふ家業を怠る結果となり、やがて後妻には、あらぬ疑惑をいだかせるに至った。

「早く我が子に家督相続の手續をすませねば長男旭仙氏にとられて仕舞う」と云う不案から、夫に對しその催促が日毎に繁しさを加えて来る。長男への気がね故決断に迷う父山本は心労の末病床の人となつてしまった。一方留守を守る後妻は幾日も帰らぬ夫への疑惑がいよいよ昂まり、つい血迷つてか中学生の息子を連れて旭仙氏の教授所へ押かけ、山本に家督相続の即時手續を迫った。

旭仙氏は初めて知つた継母と父親との葛藤に驚き、自らの手で腹違いの弟に家督相続の手續をすませて一応継母を安心させることを得たが、事はそう簡単に終らなかつた。

それから数日の後、自宅に帰つた筈の父山本は、八幡宮の鳥居下で、自宅に近い貯水池から水死体となつて発見され、その三十五日目には継母が自ら命を絶つてしまった。

この悲惨事に世の無情を感じてか、旭仙氏夫人は国元へ母急病の虚報を頼み、逃げるように帰郷してしまつた。残された旭仙氏は、家業の整理や弟の聯隊入營などの跡始末に数週間を費やし、大町の教授所も閉鎖して愛妻

の許え走り去つたが、中途半端の門弟達は此儘ですまされようはなかつた。(未完)



私の音楽ノート (四)

水藤 五郎

プロとアマ

プロとは何か、これがなかなか難かしいテーマであり、いろいろを状況とその分野によって意味が異なつてもきます。プロフェッショナルとは、つまるところ芸術上の権威者なのであって、芸術家の全て及び芸術生活者の全てがプロではないのであります。

芸術家の中にはプロの芸術家とアマの芸術家とがありますし、セミ・プロなる中途半端と云うか中立的と云うか、プロになるための過程と云うか、とにかく「半外人」と称される芸術家があります。芸術生活者とは、芸術を専門的に勉強し、それに依つて活動し、生計を立て、ゆく芸術家であり、彼は「彼は芸術家だ」と云う段階では、プロかアマか区別は出来ないのです。彼はプロの芸術家と云う時にプロであり、アマの芸術家だと云う時にアマなのであります。日本語で云えば、女人と素人になります。芸術分野に於いて、アマチュア素人と、プロ素人と、この区別の第一の、そして唯一とも云える基準は、芸術上の権威者であるか否かであり、この

他に考え得る、芸術生計者であるかどうかはあまり問題にはならないと思ひます。いかに芸術生計者であっても、芸術上の権威者でなければ、プロの芸術家とは云えないのであります。

それでは、芸術上の権威者とはどの様なことを意味するのでしょうか。芸術と云う言葉は、その言葉の発生を明治以前にさかのぼることは出来ません。それ以前に於て、芸術なる観念を表現する方法として、芸能或いは芸道と云う形がありました。現在では、芸と云う意味は芸能と同じく、歌や踊り等の場合のみ使われていますが、過去に於てはもつと広義に使われていたと思ひます。

芸術とは芸と術であります。芸は技芸、術は技術となり、それ以前には「芸」の一語に含んでいた二つの観念を、狭義に別けたのであります。本来、日本語の語彙は漠然としたものが多いのが常であります。芸は技芸、術は技術と解することが出来ますが、この「技」はテクニクであり、芸を巧みに、術を上手に、発表することが出来ることであります。随分とありふれた解釈でありまして、書いていても、読む時も退屈な説明であります。だいたい、翻訳語に依つて生れた言葉は論理的ではありませんが、ヤマト言葉、或は古くから日本語として使われている漢語、字音語と云われる言葉と比べると、情緒が低い様に思ひます。

話がそれましたが、芸をなすことによつて

生じるもの、術によつて生じるものが区別され、前者は無形であり後者は有形であることが知られています。音楽と絵画とは、同じ芸術であっても音楽の方は芸の所産であつて無形であり、時の流れによつて生滅してゆきます。これを時間芸術と私共は呼んでいますが、今日のテレビ、ラジオ、レコード等に於けるビデオテープ、音楽テープ、その他の記録装置は、時の流れが超越して音楽演奏を記録する様に思われます。たゞ、これは飽くまでも二次的な事で、時間芸術の本質を変革するものではないとされています。これに對して絵画や彫刻はどうでしょう。時間を超越して存在しつづけることは勿論、私共の目前にその姿を表現している有形なものであつて、空間芸術と呼ばれるものであります。これが芸術の大きな概念であります。

さて、この無形な所産をなす「芸」というものはどの様なことでありましようか。芸をする人、これが芸人であり、この言葉が極めてあいまいです。芸人といわず、最近では芸術家と云うのです。東京に住んでいる人、その中には練馬区人もあれば、文京区人もいます。芸術家の中には術と芸、芸と術、それぞれ分野があります。芸人と云えば具体的に判り易いのですが、芸人自らがこの言葉

をきらい、芸術家と云われることを望むのです。これは女中さんと称するのを手伝いさんとやるのに一見共通しています。芸術家と呼ばれる方が、芸人よりも五段高い感じがす

るのだそうです。女中さんよりも手伝いさんの方が数段高い思いがするのです。本来女中と云へば、相当な人への敬語であつた時代もあります。これが変化したので、変化は悪いことではありません。芸人と云うと低く、芸人さんと云うと多少親しみが入つて良く芸術家だと偉い感じがするので、これは何故なのでしょう。字句を正せば、芸術家の中に芸人があるのですから、芸人は芸術家なので、恥ずかしくもおかしくもないのです。

さて、この芸人であり芸術家である琵琶人にプロが少ないのであります。今まで私が長々と書いてきたのは、琵琶人の中に芸人、プロの二つに、大変アレルギー症状を示す方々が多いのであります故、芸人も芸術家も、プロもアマも全て同人であることを再認識して貰いたかつたからであります。かつて、芸人は特別卑賤に見られ、その様に自覚してきた歴史がありました。その風調は日本だけでは無いとしても、封建性の強い我が国では一層でありました。武士階級の芸能、芸道では特にそれが強かつたと思われまふ。このアレルギーがなくならない限り、正当な論理評価は出来ません。プロが少ないと云うのは、アマが少ないのと共通する現象であります。アマとプロとが共に増えなければなりません。芸術上の権威者が増えなければ芸術のレベルは上がらないのです。芸術生計者と云う意味だけなら、プロは存在価値が半分になります。

過去の偉大な作家夏目漱石も森外も菊地寛も作家である以前に大学教授であり、軍医であり、雑誌記者、社長でありました。それだけでは彼等はプロではなくアマチュアでありました。しかし作ら文学上の権威者であるか否かでは常にプロであり、偉大な芸術家でありました。

琵琶人の多くが、生活専門の可否を第一として、プロであることの自信と責任を放棄して、芸術上の権威たらん為の努力を失っている今日、プロにあこがれるアマチュアの存在は望めないと思えます。芸術上の権威者であることへの努力については、それぞれの個人的相違があるでしょうから、ゆっくり話を進めることにいたします。(未完)



千早、赤坂城の攻防戦(下)  
旭城

正成の奇計(二)  
部将の献策で城兵の飲料水を断つ策に出た。しかし智謀の正成は既に「五所の秘水」として一夜に約五石、いかなる日照りにも水は枯れず、更に水舟を数百用意して二ヶ月間降雨がなくとも、充分用意していた。  
又、谷水警備の敵陣を暗夜に乗じて急襲し

多数の敵を殺傷し、旗差物、紋幕を奪い取り翌朝之を城壁に掲げて嘲笑した、之を奪い返さんと五千の敵が押寄せて来ると、切った大木を城中から落として全滅させた。  
三月四日、関東からの督軍命令により敵は京から大工五百人を召集し、巾十五尺、長さ二十丈の巨大な梯子を造り、太縄をつけ車で巻立て、城壁に立てかけ橋として五、六千がほどわれ先に城中へ乱入せんとした。このとき正成は松明(たいまつ)に火をつけ橋上に薪のように投げおとし、水弾で油を注いだので火は谷風にあふられて橋は焼けおち、橋上の敵兵は悉く焼死した。ある時は二十個程のわら人形に甲冑を着せて城の下に立て、畳盾をめぐらせ、夜明けに城中からドツとときの声をあげると、城兵が打って出たと矢を射かけて攻め寄せれば、城の上から数十の岩石を投下して敵に大きな損害を与えた。

各地に勤皇軍起る  
このころ後醍醐天皇は隠岐脱出に成功し、和名長年は船上に挙兵、護良親王は大和多武峰に陣を固められ、尊良親王は四国で、恒良親王は但馬に各々勤皇軍を統べ給い、又各地に討幕勤王軍が起った。そして五月二十二日遂に鎌倉幕府は倒れ、六月五日後醍醐帝は京都に還御されて建武中興の大業がなつたのである。

正成湊川で玉碎  
その建武中興も僅かに、建武三年(一三三三)五月楠正成は七百余騎を率いて湊川に出

陣し、壮烈な戦死を遂げた。その玉碎に至るまで、我が子正行を桜井の駅に呼寄せて「七生報国」後事を托して死地に赴く。その心構まことに忠勇義烈とたゞえられ、武人の鑑と後世に名を残した。  
忠魂湊川神社に祀らる

現在の社殿は国民の浄財によって昭和二十七年復興したもので、型式は権現造りに似ているが鉄筋コンクリート建て、戦後の新しい神社建築様式として代表的なものだろう。身を潔めて社前に額づけは、遙かに三つの扉が拜せられ、中央扉の奥には主神大楠公、右に大楠公夫人、左に小楠公が祭られ、その他大楠公の弟正季卿以下一族十六柱並びに菊地武吉卿が祭られている。  
「嗚呼忠臣楠子之墓」が神社境内の東南隅にある。これは楠公父子並びに正季卿以下一族十六柱及び菊地武吉卿を葬ったところ。  
この墓は永年荒廃していたものを、豊臣秀吉が検地に行つた時、墓の東西八米、南北十二米を免租地とした。その後尼ヶ崎藩主青山幸利らによって梅と松が植えられ、又五輪の塔が建てられた。そして元禄五年(一六九二)に至って水戸藩主徳川光圀(水戸黄門)は、家臣佐々助三郎宗諱を湊川に遣わして、光圀自筆の「嗚呼忠臣楠子之墓」の文字を書き、裏面に明の朱舜水作賛文を岡村元春に書かせて之を刻み込ませた。  
忘れられていた「七生報国」の大精神も、この墓碑の建立によって大楠公の盛徳は大い

に宣揚せられ、この精神を承けついで明治幕末勤皇思想の発展を助け、維新への力強い指導力として作用した。即ち頼山陽、吉田松陰、真木保臣、三条実美、坂本竜馬、高杉晋作、西郷隆盛、大久保利通、木戸孝允、伊藤博文等は皆墓前に参詣して、報国の至誠を誓い国事に奔走したものである。  
京絃愛読の諸先生方は、大楠公の忠誠と正義を琵琶によって強く心に刻み付け、往時の模様を追想しながら弾奏されている事と思ふ。

平家落人(おちうど) 壇の浦で源氏にの末えい集合 滅ぼされ各地に散らした平家生き残りの子孫達が四月二十三日、平家滅亡七百九十年祭が催される下関市の赤間神宮に集り全国平家一族の会を結成した。

琵琶で語られる一の谷、屋島、壇の浦、次々と敗れて姿を隠した平家一族の末えいは現在北海道から九州まで全国各地に散在し「平」の姓を持つ人も多い。山陰平家一族は弥平兵衛宗晴の子孫という鳥取市の墨土惣市氏を中心として四十八年二月発足、会員は鳥取市内のほか隣県の島根、兵庫などに在在の約百人、毎年数回平家ゆかりの地を訪ねたり勉強会を続け、これを聞いて「私も平家一族」という手紙や電話が墨土さんや会員に殺倒しその中には同郷の末えい約二百人連名の愛媛県松山市からのものもあり「一層のこと全国的の組織に」ということになった。発起者は平

時忠の子孫石川県の時国恒太郎氏ら六十人。発会式には約百五十人が参加し「おいらん道中」や平家逃亡を偲ぶ安徳幼帝、平清盛、建礼門院徳子らに扮したり公卿、武士、官女装束姿で神社境内を練り歩いた。(朝日新聞から) 尚当日の様子はNHKテレビ等でも美々しく且興味深く放映された。

「筑前琵琶に 魅せられた人々」 伝統芸術筑前琵琶に魅せられた人々 情熱をかける女性師匠と、もの悲しくみやびなその音色、語りには惹かれた人々が神戸にいます。お師匠さんは葦合区上筒井五丁目柴田旭堂師、グループは東灘区の作家春木一夫さんや画家、学者、会社員、公務員ら約三十人。七年前に「平家物語を聴く会」を組織して毎月一回生田区の県民会館に集り琵琶によって平家物語の真髓に接している。この会は、兎角海外からの文化だけに目が向き勝ちな神戸で先代旭道旭栄夫妻、二代旭堂師の努力により折角根づいた伝統芸術を市民の基盤から広く支えていこうという目的で昭和四十三年に発足して現在に至ったもので、この程開かれた例は平家物語中の「巻」小督。宝塚スター上原まり嬢(旭堂)の母親でもある旭堂さんの端正な顔が、ある時はキッと引締り又悲しく囁きかける。捌捌きも鮮やかに悲恋の美女のくだけりが、と語り、会員は腕を組み膝を抱き只うつとりと聴き入っている。最近参加した若い人の姿も混っていた。

琵琶は奈良朝時代に中国から我が国に入り鎌倉時代に平家物語を語る楽器として琵琶法師によって世に広まり明治以後博多を中心とした筑前琵琶、鹿児島を中心とした薩摩琵琶の二つが主流となり今日では全国的に普及している。(四月二十三日朝日新聞) 会員を前に

柴田女史演奏中の写真入(から抜萃転載)

辻 靖剛氏 東京辻靖剛氏は多年伝統芸勲四等授賞 能琵琶の発展振興に貢献された功績により今春の論功行賞に勲四等瑞宝章を贈られた、謹んで御祝詞を申し上げる 生存者芸能人に勲四等を贈与されるのは極めて稀で辻氏の栄誉は勿論のことながら引いては琵琶界全般の名誉と云わねばならぬ。

武 絃 会 ①四月六日 一水会多摩支部 合同研修会 屋小金井市福社会館。井伊大老一落合白水 桜狩一石井效水 竜の口一加藤錦陽 川中島一中島瀑水 本能寺一伊藤警水 茨木一中村修水 鷺の夢一伊集院鼓城 旅順開城一坂本錦道。六時閉会。

②五月四日昼同所にて開催。城山一中島瀑水 小栗栖一伊藤警水 狩野の雨一石井效水 別れの盃一小川吐水 竜の口一中村修水 月下の陣一工藤慈水 石重丸一篠宮櫻水 彰義隊一清水源城 川中島一伊集院鼓城。七時閉会  
伝統芸術 四月十九日十一時一十六時東名流会 京日本橋三越劇場、主催玄象会(会長弘沢雨水氏)一五〇〇円。薄陽江(川)清川嵐舟 小敦盛一八束一峰 本能寺一平井洲誠 城山一須田誠舟 河内島一浅野晴風 山下晴楓 小栗栖一板谷旭邑 羅生門一押川旭葉 勸進帳一弘沢雨水。外に三曲、小唄、哥沢、尺八、長唄、講談等八番。  
錦びわ第二回 (水藤錦穂三回忌にあたり定期演奏会) 四月十九日夕五時東京赤坂シヤンテイホール(五〇〇円)。六段一Rマックレーン 青葉の笛一網野市子 後鳥羽の院一水藤五郎 花の敦盛一藤波桜華